

特定非営利活動法人

宮入
慶之助
記念館



宮入慶之助記念館だより

特定非営利活動法人宮入慶之助記念館
2022(令和4)年 6月21日発行

第32号

巻頭言 「敵を知り、己を知って」感染症と対峙する 名誉館長 太田伸生

この2年半の間の新型コロナウイルス感染症流行によって、日本だけでなく世界中の国々が大きな打撃を受けました。人命の損失ばかりではなく、人の往来や物流の停滞、経済的な損害など社会生活面での被害、そして教育や文化面への影響など、新型コロナウイルス感染症流行を中世ヨーロッパにおけるペストの大流行に模して論じる識者も多く見られます。最近では新型コロナウイルス感染症の流行だけでなく、ヨーロッパで人のサル痘患者発生が急増していることにWHOは警鐘を鳴らしています。日本国内ではマダニ媒介性で死亡率も高い重症熱性血小板減少症候群 (SFTS)の増加が報じられるなど、私たちは今日なお感染症の時代に生きているのです。

人は有史以来、常に感染症との戦いにありました。感染症は多くの人命を奪い、人々の幸福な生活を侵害してきました。医学の歴史とは、突き詰めるところ感染症との戦いであったと私は考えています。人間は治療薬を開発し、ワクチンを実用化し、その都度感染症は克服できたと錯覚したことが何度もありましたが、残念ながら人々の期待は常に裏切られてきました。感染症の病原体は人智を上回る策を使って、人間の脅威である地位を譲ることなく今日に至っています。

人間が感染症と戦う上で最も重要なこととは何でしょうか？私は感染症との戦いは近代戦争と同様に情報戦であると考えています。燕子の言葉に「敵を知り、己を知れば百戦危うからず」とありますが、「敵を知る」、即ち感染症の病原体を知り感染経路を知り、その予防法を知ることによってほとんど感染症を予防できるのです。日本住血吸虫症が脅威であった100年前の国内流行地で、敵を知ることで私たちはその脅威を取り去ることに成功しました。治療薬もワクチンもなかったにもかかわらず、宮入慶之助による中間宿主貝の発見により確実な予防法が可能になったからです。山梨県では研究者や行政関係者だけでなく、一般市民や小中学生までミヤイリガイが感染流行に果たす役割を正しく理解していました。燕子のもう一つの重要な教えに「己を知れば」がありますが、山梨の旧流行地住民は「己の危険」を知って宮入慶之助が発した情報を行動に結びつけました。新型コロナウイルスもサル痘も燕子の言葉に倣えば予防が可能な感染症です。しかし、現代人はワクチンに過度に頼るようになって、私は「己を知る」ことをなおざりにしているように感じます。

やがて新型コロナウイルス感染症が人類の脅威でなくなる日も来るでしょう。問題はその先のことです。山梨県では日本住血吸虫症流行が終息して25年以上が経過しました。数年前の調査で、かつての流行地にある中学生は宮入貝のことを今日ではほとんど知らないという結果が得られて、「敵も己も」忘れてしまったことに愕然としました。私たち人間は忘却する生き物です。そして忘れた頃に次の感染症が襲いかかってきます。

福島県にある野口英世記念館では、今年7月に感染症ミュージアムを開設します。世界の重大な感染症の制圧に貢献した日本人研究者の功績を紹介しており、宮入慶之助の功績も詳しく紹介されています。感染症の脅威を改めて思い知らされた現代の人間にとって、宮入を始め感染症との困難な戦いに身を投じた多くの先人の業績を再認識することは、感染症の時代である現代に生きる人間にとって忘れてはならないことであると思っています。

明治10年4月に創設された東京大学は明治19年3月の帝国大学令によって帝国大学となり、この時に大学院が設置されます。

①帝国大学ハ大学院及分科大学ヲ以テ構成ス(第二条)

②大学院ハ學術技芸ノ蘊奥ヲ攻究シ分科大学ハ學術技芸ノ理論及應用ヲ教授スル所トス(第二条)
帝国大学令では上記のように帝国大学は大学院と分科大学からなると規定され、大学院は學術技芸の「攻究」機関、分科大学は學術技芸の理論および応用を教授するための機関としています。

慶之助は京都府医学校を明治27年5月15日付で依願退職し、同年同月末に帝国大学大学院に入学します。京都府医学校には2年8か月余り教諭(生理学・衛生学)として勤務しますが、退職して大学院に進学します。

大学院の設置以降、在学期限や授業料などは様々な変更がありましたが、慶之助が入学した頃の大学院規定の在学年限は5年、入学後最初の2年間は分科大学研究生の扱いで授業料は無料、あとの3年間も授業料は無料ということでした。明治24年以前は最初の2年間は授業料納付の扱いになっていました。

大学院に入学したからといっても特別の施設やカリキュラムが設定されているわけではなく、指導教授について自分の研究テーマを各分科大学で研究するというのが実態でした。

大学院も明治32年の新规定では院生を統括する主体が各分科大学であることが明文化され、「大学院医科」のような所属の区分が行われるようになります。

慶之助は大学院に入り、「内科学一般及脚氣ノ筋」という研究テーマに基づいて研究しています。慶之助は東京大学医学部予科のころから脚氣に悩まされており、自身の経験から脚氣を研究テーマに選んだのではないかと思います。慶之助が在籍していた時の大学院生は全部で94名で内訳は法学士19人、文学士20人、理学士17人、工学士19人、医学士11人、薬学士2人、農学士3人、林学士3人でした。明治27年の大学院学生名簿を見ると夏目金之助(漱石)の名前が眼にとまります。漱石は明治26年7月に大学院に進学しています。研究テーマは「英文学科中英国小説」でした。漱石は慶応3年(1867年)の生まれなので、慶之助より2歳年下になります。慶之助は翌年の1月には退学し、わずか7か月余りの帝国大学大学院生活でした。

短期間の大学院生活でしたが、1月末には第一高等学校医学部(現千葉大学医学部)の教授として任じられていますので、京都府医学校を退職した時から第一高等学校医学部の教授のポストが約束されていたのではないかと考えます。それは京都府医学校を退職した年の9月に高等学校令により、第一高等学校が「第一高等学校」となったことと大いに関係があることが推察されるようです。

ところで、慶之助は、眼科医を開業したということが伝わっていますが、これについては資料が全く残っていないので、詳しいことはわかっていません。しかしながら、慶之助の経歴を見る限り、眼科医の開業は、この大学院時代の時だったのではないかと考えられます。大学院はカリキュラムが設定されているわけではないので、授業を受講するという制約はありませんでした。自由な時間が使えたこの時期に眼科医を開業したことが推測される由縁です。

帝国大学では外科・内科・眼科・小児科・産科婦人科等の臨床講義を履修していますが、開業しやすいという点では内科医と眼科医が考えられます。それで両者のうち眼科医を選択したのではないかと推察されるようです。しかしながら、診察室、診療機材、人員など開設費用の初期投資は多額を要したものだと思われます。開業した地はおそらく東京と思われそうですが、詳細は不明です。

慶之助は、京都府医学校時代の明治25年に結婚しますが、大学院の授業料が無料とはいえ、生活費を得るために、開業医を思い立ったのかも知れません。眼科医を開業したものの、慶之助が大人や子どもの患者に対して厳しく接したので、開業医はうまくいかなかったと伝わっており、短期間の開業に終わったようです。大学院は慶之助や漱石にとって、次の職への腰掛けのようなものだったようです。

中学生が日本住血吸虫症を調査研究し、その成果をまとめた本を刊行

2021年11月4日（木）に山梨県の「きのくに子どもの村学園南アルプス子どもの村中学校」の3年生3人と校長先生が当記念館に来館されました。南アルプス市は2003年4月に6町村が合併して誕生した市ですが、この中学校の所在地が旧中巨摩郡八田村で、日本住血吸虫症の感染地だったところです。この中学校の基本方針は、「自己決定、個性尊重、体験学習」を原則とし、時間割の半分を占めるのが「プロジェクト」という教科の枠をはずれたカリキュラムです。各自が活動テーマを考え、学習を進めます。この「担任のいないプロジェクト」というのが子どもの村の目玉になっているようです。当記念館に来館された中学生3人は、学校が立地するところが以前は日本住血吸虫症（地方病）の感染地だったことに着目し、日本住血吸虫症をテーマに選び、この病の資料を集め、自分たちで計画を立てて調査研究を重ねてきたということです。昭和町の杉浦医院を訪ねた折に、当記念館の存在を知ったようで、来館の日時など中学生から直に連絡がありました。

「この1年間、地方病を深く研究してきました。この絵本は多くの人に届けたいという願いとともに・・・私たちの研究成果がすべて詰めこんだ大作となっております。地方病の資料を集めることから始まり、絵本の構成をどうしたらわかりやすく伝わるか、文章、絵など細部までこだわり抜きました。私は地方病を知り、地域の人々が団結して病気をなくしたという事実に関心、感動しました。・・・ですが、いま地方病を知っている人はほとんどが高齢者です。いずれこの歴史は風化してしまうかもしれません。それを防ぐために私たちは、受け継いだバトンを、次の世代へ渡すことが大事だと思っています。」（南アルプス子どもの村小学校・中学校HPより）

1年間にわたって中学生たちが地方病について調査研究し、その集大成として2022年4月にこの本が完成し、発刊となったものです。ここでは大勢の方に知っていただきたいために、詳しく紹介していきたいと思ひます。

【地方病の歴史（P1～18）】

「地方病の歴史」という表題は付いていませんが、「むかし、甲府盆地にはおそろしい病気があった」という文言から始まり、解剖に供するため自分の体を差し出した杉山なかさんの話、三上三朗医師、岡山県の桂田富士郎博士の猫の解剖から虫の発見、牛を用いた経皮感染や経口感染の実験のこと、ミヤイリガイという中間宿主のこと、地方病をなくそうという活動、水路をコンクリートに変えたこと、地方病流行終息宣言のこと、日本以外での感染流行地のことなど各ページにカラーの絵とわかりやすい文章とで構成した体裁となっています。

【地方病にまつわるくわしい解説（P19～28）】

『「解剖」とは？』、「ミヤリガイってどんな貝」、「治療薬・スチブナール」、「徴兵検査」など22項目について、わかりやすく説明しています。



▲表紙



▲「地方病の歴史」2ページ



▲「地方病の歴史」5ページ

【元山梨県衛生公害研究所副所長の葉袋さんにインタビュー（P29～31）】

葉袋さんは地方病撲滅のために最前線に立って、仕事をされてこられた方ですが、中学生たちが葉袋さんを学校に呼んで講演会を行ったようです。その機会にインタビューを行って、この記事になりました。

【地方病について知れる場所（P32～34）】

山梨県立博物館、山梨県立富士湧水の里水族館森の中の水族館、宮入慶之助記念館、昭和町風土伝承館杉浦醫院、目黒寄生虫館、洗心堂小野醫院跡の6施設について、館の概要、おすすめポイント、お問い合わせ先を紹介しています。

【地方病をなくすために力を尽くした医師・小野徹（P35）】

旧中巨摩郡鏡中条村（現南アルプス市鏡中条）出身の医師で、ミヤイリガイの駆除のため用水路のコンクリート化を推し進めた人として紹介しています。

【地方病という病気を知って（P36～37）】

3人の中学生の地方病の調査研究に関わってきた感想がまとめられています。

◆「僕は地方病を知って、まず驚きました。いつも通っている学校のちかくにこんな病気があったなんて思いもしませんでした。僕は長野県民だから知らないだけで、山梨県のほとんどの人は地方病について理解があるのだろうか、と思っていたのですが、実はその真逆で、山梨県の中学生のほとんどがこの病気を知らない、という事にも驚きました。」（杉山沙弥）

◆「地方病という病気を知って最初にこんな病気が山梨にあったことに驚きました。そのあとすごく興味が湧いてきました。この病気を調べていくうちに怖いと感じることがあります。皮膚を食い破り、入ってくるのも怖いですし、お腹が膨らむのも怖かったです。調べていくうちに沢山の知識が入ってきて、次々と深く知れるのが楽しかったです。」（中川開登）

◆「地方病は本当に恐ろしい病気だ。感染サイクルを知った時に私は驚愕した。こんな複雑なサイクルをよく解明したものだ。この病を知って、その当時に尽力した方々の苦勞に想いを馳せるとため息がでる。でも、これは終わった話ではない。地方病の歴史は決して忘れ去られてはならない。私は地方病を知って、地域を見るものさしが増えた。もっと多くの人に、地方病の歴史を知ってほしい。」（菊池花音）

【元青年海外協力隊・三井麻友子さんにインタビュー（P37）】

【編集後記（P38）】

地方病の調査成果を踏まえて、絵本に仕上げるまでの3人それぞれの苦勞が記され、地方病を知る最初の第一歩になり、沢山の人が手に取って、沢山のの人に伝えていって欲しいと述べています。

【この本ができるまでにお世話になった方々（P39）】

【参考文献（P40）】

本編の「地方病の歴史」は絵本形式で、要領よくわかりやすくまとめることに主眼が置かれ、「地方病の解説」までのところには漢字に全てルビが振られています。多くの世代の人に読んでもらい忘れ去られつつある地方病の歴史を伝えていきたいという強い思いが感じられる本となっています。

『中学生が伝える 恐ろしいやまい・地方病』

（2022年4月1日発行 A4判横、40ページ、内カラー18ページ、300部作成、頒価500円）

★問い合わせ先：学校法人きのくに子どもの村学園南アルプス子どもの村中学校ゆきほたる荘

〒400-0203山梨県南アルプス市徳永1717／TEL055-287-8205

宮入慶之助生家跡に案内看板設置される

長野市松代町西寺尾（旧更級郡西寺尾村）の慶之助生家跡に案内看板が2022年3月に設置されました。これは長野市松代地区住民自治協議会内の「歴史文化とまちづくり協議会」が、日本の近代化・松代の発展に尽くした人々を知ってもらい、郷土愛を育もうと企画したもので、子どもたちへの地域学習の教材としても活用したいという趣旨です。令和元年度から「まち歩き観光推進のための人物案内看板設置事業」として推進している事業で、令和3年度までに25基設置されています。

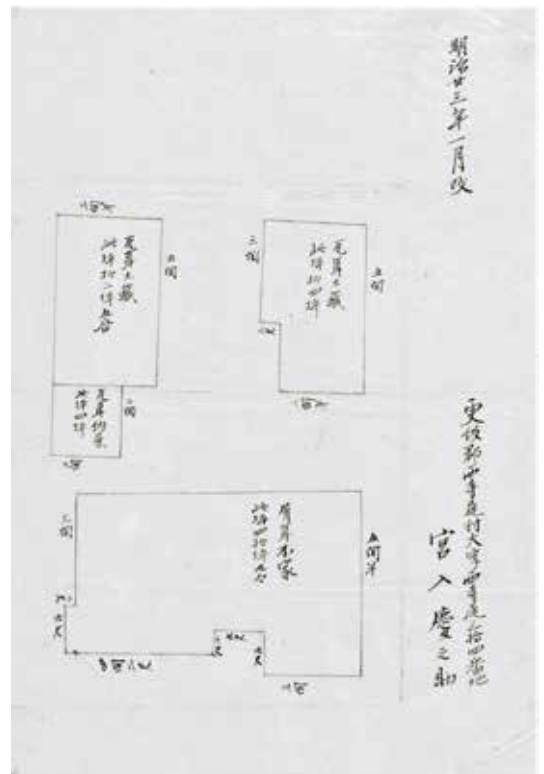
当記念館に、看板設置の趣旨説明と説明内容の原稿作成依頼があり、限られた字数で慶之助の功績を紹介する説明文を作成しました。慶之助の顔写真と説明、下段には英訳も付けられています。看板は高さ1.5～2mでアルミ製、生家跡地に入る道端に建てられました。

ところで、生家跡の資料が宮入家に残されています。明治23年1月に慶之助が作成した生家の家屋配置図です。屑屋本家1棟と瓦葺土蔵2棟が墨書され、それぞれ建物の寸法と坪数が記されています。本家（母屋）の位置するところが南側、土蔵が背後の北側の配置と思われます。「更級郡西寺尾村大字西寺尾三拾四番地」とありますが、現在この地番は存在せず、生家跡のところは現在916番地になります。資料に「明治廿三年一月改」と記載された年は、帝国大学医科大学本科第五年に在籍していた時で、長兄欣吾から家督を相続するのはずっと後年のことであり、この資料が何の目的で作成されたのかはわかりません。

慶之助の生家跡所在地は、昔からの集落景観を残すところで道が狭く、なかなか観光客が行きにくいところですが、松代地区住民自治協議会では、今後看板設置場所のガイドマップを作成予定とのことです。マップが作成されれば、慶之助の生家跡を訪ね、さらに記念館にも来館する人も増えるのではないかと期待しています。



▲宮入慶之助記念館と生家跡関係図



▲明治23年時の本家と土蔵配置図

書籍紹介

『地方病を語り継ごう—流行終息宣言から25年—』

2022年3月31日発行 A5判 295ページ 昭和町教育委員会

2021年は、山梨県の「地方病流行終息宣言」から25年が経過し、『今や「地方病」という病はもとより、その言葉さえ聞く機会が減って、・・・風化しつつあるこの病を後世へ語り継ぐため』と、本書のタイトルにもなった刊行の趣旨を「はじめに」で記しています。

「第一章地方病体験記」の「一 地方病に罹患」では、25名の体験記憶が載せられ、そのうち自身が罹患した13名の体験記録など、大半が昭和10年代生まれの80歳代の方で、当時の有病地の様子が生々しく語られています。

また昭和町では群舞するゲンジボタルが初夏の風物詩でしたが、ミヤイリガイの駆除や水路のコンクリート化により絶滅状態になりました。そうした当時の「二 ホテルの記憶」を7名の方が記しています。「三 撲滅の最前線」では、行政（山梨県庁、昭和村、中富町）の立場で直接に撲滅活動に携わった方々、直接関わってきた父を見てきた方、また地方病撲滅指導員になり、遺書により死後、屍を解剖に提供した祖父のことを改めて知った孫の方など5名の記録が掲載されています。

「四 杉浦醫院との関わり」では、親族や隣家、出入りの大工さん、当時の患者さんたちが、「杉浦醫院はいつも混んでいて、病人をリヤカーに乗せて来ていた」、「三郎さんの奥さんが調剤室で薬の仕事をしていた」、「三郎先生は、話す言葉もゆっくりと丁寧で、とてもやさしい先生」、「患者に対して寛大で、大変穏やかなお人柄だった」と地域の人々が杉浦醫院のことを証言しています。

「五 未来に向けて」では、地方病の教材化に取り組み、社会科で地方病の授業を行った先生の体験、ゲンジボタルの復活を願う思いの記録、若い世代の地方病の歴史を学ぶ重要性の提言、「昭和町風土伝承館 杉浦醫院」開館までの流れ、多種多様な生き物が暮らせる環境をつくる「メダカ宣言」が掲載されています。

「第二章 寄稿文」では、地方病撲滅の最前線に立って尽力した方々（加茂悦爾氏、林正高氏、薬袋勝氏、梶原徳昭氏など）が寄稿されています。

「第三章 資料編」では、「地方病関連年表」、「杉浦健造・杉浦三郎略歴年表」、「地方病関連史料館など」、「杉浦醫院関連蔵書・資料関係など」が掲載されています。

本書は、戦後から昭和40年代頃の有病地での地方病罹患体験と撲滅に向けての官民一体の取り組みの様子などの体験、記憶、提言で、1979年の『地方病とのたたかい（体験者の証言）』に続く最後になると思われる証言集を昭和町風土伝承館杉浦醫院の編集によってまとめられたものです。



編集後記

こここのところ、山梨県昭和町の風土伝承館杉浦醫院から当記念館を紹介されたという方が多く来館されています。来館者からは、感染有病地の実態を伝える資料館と住血吸虫を研究した研究者の功績を伝える資料館という両者を見学することができて良かったという感想をいただいています。杉浦醫院には感謝申し上げます。

宮入慶之助記念館だより 第32号

発行者 特定非営利活動法人

宮入慶之助記念館

編集者 山口 明

〒388-8018 長野市篠ノ井西寺尾2322

Tel&F ax 026 (293) 4028

HP：《宮入慶之助記念館》で検索

発行日 2022年（令和4年）6月21日